



勝林寺寺報

天親菩薩論註解

報土因果顯誓願

往還廻向由他力

正定之因唯信心

ようやく梅雨が明け、海水浴シーズンの到来です。子どもたちが小さい頃は、毎年浮き輪をもって、竹野の浜や久美浜に泳ぎに行ったものですが、ここ最近、夏の海の様子がすっかりわからなくなってしまうました。それでも、出石の観光客の数は夏休みに入ると一気に増え、みるからに海水浴帰りの日焼けした子どもたちが寺の前の通りをはしやぎながら歩く姿を見ると、とても楽しそうで、頑張った海に行つてみようかとも思いますが、いやいや今ではもうこの夏の暑さ、浜の暑さに耐えられそうもありません。

さて、勝林寺の前の道はご存じのとおり一方通行です。境内から出るときは、右にしか曲がれません。一方通行ですから右からは車が来ないことを信じ、左だけを見て車が来ないことを確認して門から出れば良いのですが、この時期は右側も十分に確認して出ないととても危険です。一方通行の交通ルールなんて信じられませんが、交通ルールは社会の中で人々が安心・安全に生きていくために作ったルールです。みんなが守るものだと信じています。しかし、夏休みの観光地では往々に一方通行の逆走があり、妄信して飛び出すと事故にあいます。

私たちは交通ルールだけでなく、政治、経済、文化など様々な面で人と人との信頼と、国家的

な制度を信用して、安心・安全な日々の生活を送っています。しかし、人の世の信用はあてにならないと教えるのが仏教です。信じて飛び出すと事故にあいます。交通事故も恐ろしいですが、私たちはつい七十年余り前に国を信じ、多くの人たちが敵の空母に突っ込めばお浄土に行けると信じ、尊い命を落としていきました。決して遠い昔のおとぎ話ではありません。そして今も、外からさめた目で見れば愚かで、おかしな人間行動が妄信によって世界中で多くの命を奪い合っています。

私たち浄土真宗の教えは“信心”がかなめになっています。この“信心”が特徴となつて、法然上人の浄土教とはまた別の、親鸞聖人によつてあきらかにされた浄土真宗があります。そしてその信心は“他力の信心”として表現されています。人の世に蔓延する妄信に、光を当てて仏の知恵としての信心をわが身に得ることが“他力の信心”であり、私たちはそのことで世間を越えてお浄土に往生することが定まった正定聚の位につくのです。阿弥陀様万歳、ナムアミダブツ！”と叫んで自爆することは確信であっても妄信であり、自力の信心の極みです。

毎年八月八日に、勝林寺では戦没者の追悼法要を行っています。私たちは戦争という悲惨な社会的過ちを反省し、誤った歴史を二度と繰り返さない学びを深めるとともに、お念仏の中に聞き取られる他力廻向の真実信心によつて、これからも何が起こるか分からない五濁悪世の世界をひたすらお浄土に向かつて生きていくうとしているのです。

(文責 住職)

ご案内

盂蘭盆会

全戦没者追悼法要

日時 令和一年八月八日(木)
午後二時より
内容 献灯献花献香
全戦没者呼名
お勤め(焼香)
記念法話

戦後七十五年の節目の年を迎えました。戦争を語り継ぐことのできる人が、どんどん少なくなる今日ですが、戦争を知らない私たちにもできることがあります。その一つが、勝林寺で毎年お勤めしている「全戦没者追悼法要」ではないでしょうか。戦争で犠牲になられた方のお名前をお一人お一人読み上げさせていただくとき、確かにその方の命によつてつながれた命があり、今があることを実感させていただきたく思います。一人でも多くの方とこの思いを共有させていただきたいです。ぜひ、お参りください。

仏婦子ども研修会



日時 令和一年八月十九日(月)
午前九時四十五分受付

内容 お参りの仕方、お勤めの仕方
ゲーム、紙芝居、工作、川遊びなど
お昼はソーメン流し

「地域の宝」である子どもたちは「お寺の宝」でもあります。子どもたちにとつて、お寺や仏さまが少しでも身近なものとなり、命について考えるきっかけになればとの思いで、毎年行っています。近年は、同居の子どもさんだけでなく、離れて暮らす娘さんや息子さんの子どもたちやそのお友達がたくさん参加してくれまます。ご縁のある方なら、どなたでも参加していただけます。お待ちしております。

八月 勝林寺 予定

三日(土)	森友 強 宅 初盆
四日(日)	弘道校区 戦没者追悼式 後藤富佐子宅 初盆
六日(火)	長谷川進 宅 初盆
八日(木)	勝林寺 戦没者追悼法要
九日(金)	田中重雄宅 初盆
一〇日(土)	蔭山文字宅 初盆 湯口博文宅 初盆 谷垣久司宅 初盆
一日(日)	出石 盆
二日(月)	出石 盆
三日(火)	金久康則宅 初盆 出石 盆
四日(水)	衣川正之宅 初盆
五日(木)	生田克巳宅 七回忌 清水家 初盆
八日(日)	中島茂喜宅 初盆
九日(月)	勝林寺 子ども会
二三日(金)	地藏盆
二四日(土)	田中啓治宅 三回忌法要
二五日(日)	森戸卓也宅 一三・二五回忌
二六日(月)	みのりを聞く会 (敬称略)



俱会一処

今年もまたお盆が近づいてきました。お盆には、遠く故郷を離れていた人も、それぞれ故郷に帰ってゆき、祖先のお墓にお参りいたします。このことはゆかしい日本伝統の風習であります。ところで、そのお墓が家族の合同墓である場合には、その墓石によく「俱会一処」と書かれたものがあります。このような墓石は、ことに広島、安芸の国と、島根の石見の国地方のみに見られるもので、真宗信心の盛んな土地に生まれた形式のようであります。

この「俱会一処」という言葉は、真宗で用いられる『阿弥陀経』という經典の中にあるもので、そこでは「諸上善人俱会一処」(もろもろの上善の人は、ともに一処に会う)とあり、それは、日頃よくお念仏を喜んでいゝものは、死んだら仏の浄土にゆくことができ、そこで先にいった人々に、再び会うことができることを意味します。この經典の言葉を簡単に解釈して、死んだらみんな浄土で会えるという人がいますが、そうではありません。「上善の人」だけについて「俱会一処」といわれるわけです。この上善の人とは、上に申したように、日頃によく仏法を学んで、念仏を喜んでいゝ人のことで、念仏を申す人に限って、浄土にゆくことができ、ともに会うことができるという教えであります。

親鸞聖人のお手紙に

「覚念房のおおせられて候やう、すこしも愚老にかはらずおはしまし候へば、かならずかならず、ひとつところへ参りあふべく候。」

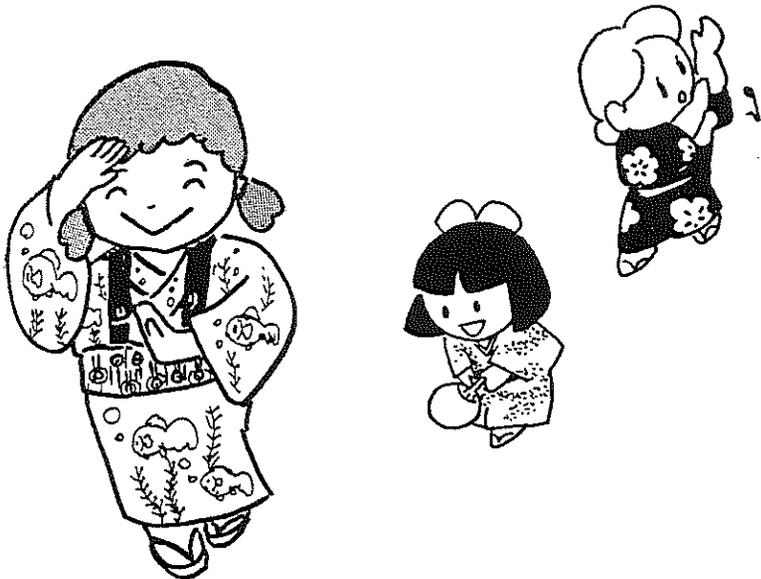
覚念房という弟子が、亡くなったという悲しい知らせを受けて、その覚念房が亡くなる前に申したという言葉について、親鸞聖人が、それは私の思いと同じです。私たちは、やがて必ず必ず、ひとつところ(一処)でお会いしましょう、

と申されている文章です。

ここで「ひとつところへ参りあふ」とは、上に見たところの「諸上善人俱会一処」の経文にもとづいて書かれたものでしょう。またここで覚念房が、死ぬる前に申した言葉が何であったかは分かりませんが、前後の文面からすれば、身近な人々に向かつて、浄土で待っている、また会おう、というようなことを申したのでないかと思われまゝ。それで親鸞聖人が、それらうけて「愚老にかはらず」といい、また「かならずかならず、ひとつところへ参りあふべく候」と書かれたものと思われまゝ。

私たちがまたおたがいに先になり、後になりして死んでゆかねばなりません。この「俱会一処」の教えをしつかり学んで、もしも自分が先に死んでゆく場合には、「浄土で待っているよ」といい、また身近なものの死を見送る場合には、「必ず必ず浄土で会おうね」と言って、お別れしたいものです。

(信楽峻磨遺稿法語集より引用)



法語カレンダー八月

涅槃の真因は

ただ信心をもつてす

娘がまだ小学校の低学年だったころ、母親の誕生日に花束をプレゼントしてくれました。お年玉をもらった時から「使わずにママのお誕生日に花束を買おう」と考えていたようです。当日、ピアノのレッスンの後、急いで花束を買い、帰りが遅くなると心配するからとダッシュで自転車をこいで帰ってきたそうです。花束を渡してくれた娘の冷たいその手が、一瞬母親にふれたその時、それだけで娘が考えてくれたこと、してくれたいことを全部受け取ることができたそうです。阿弥陀さまは、私たちが救おうとよくよくお考えになられ、救うために必要な全てを成しとげてくださいました。そのお救いが今私に届きました。まことなる心など一切持たず、救われることに疑い無い心を発し、ましてお浄土に往き生まれたいなど、思いもしないこの私に、阿弥陀さまのまことの心、救うことに疑い無い心、お浄土に生まれさせるといふ確かなお心が届きました。

私にはただ、そのお救いを受け取らせ、ただただおまかせさせるといふ信心一つのお救いです。ただそのお救いを聞き受け、よろこばせていただくご信心、そのご信心一つに、阿弥陀さまのお救いの全てを頂戴するのです。さとりを開き仏と成るには、さとりを求める心を発し、まことの心をもつて、永き修行によつて徳を積み、すべてを成就して初めてさとりを開き仏に成ることができるといふのです。

何一つなし得ないこの私を、必ずこの上ないさとりの仏に成らせていただく正しき因でした。いま、さとりを聞き仏と成る、涅槃にいたるいのちを生きていくことができます。これが、浄土真宗・阿弥陀さまのお救いです。(月々の言葉)

ごあん

ご門徒の皆様のお供えとご奉仕とお参りによつて、今年も永代経を勤めることができました。寺にとつての二大行事が、夏の永代経と冬の報恩講です。毎年、同じようにお参りに来ていただく皆さんはお気づきのことと思いますが、いつもの法要なら、最初から最後まで皆さんと一緒に参らせていただく私、この二つの法要では、お焼香の後しばらくしたら席を立ちます。実は、内陣に出動してくださった町内のお寺様の接待をするためなのです。永代経なら冷たいおしぼりと飲み物、それによく冷えた果物やお菓子を説経の後すぐに出せるように用意をします。何年やってもうまくタイミングが計れません。早すぎてぬるくなつてしまつたり、遅くなつてお待たせしたりを繰り返して、悪戦苦闘しています(笑)私のその様子を見ていらした講師さんが「役員さんにお願ひされたらどうですか」と言ってくださいます。私は「これが私の役目ですから」とお答えします。私が住職と結婚した当初は「坊守になる」なんて思つてもいませんでした。だから、必要な時だけお手伝いをする程度で、寺にご奉仕する前坊守の背中を見てきませんでした。ただ、永代経と報恩講の時は、前坊守が、庫裏から書院につながる廊下を「バタバタバタ」と威勢の良い音を立てて、何度も何度も往復するのを二階の部屋で聞いていました。どんなことをしていただのかは見ていませんでしたが、何回も往復することを厭わず、その時にできる精一杯のおもてなしをしていたのだらうというところが、その足音から伝わってきました。私は、「前坊守の足音を聞いて育つた」というわけです。だから、永代経と報恩講の時、私はじつと座っていることができないのです。(文責 坊守)